

毎日 セミナー通信

第88号

発行
毎日セミナー
東京都新宿区
大久保 3-14-4

希望は強い勇気であり、
新たな意志である。
世界史担当・柚留木 芳徳

さあ 命がけて 頂上を目指そう

校長 平松 貞実

この春お店に入った生徒もそろそろ2カ月が経過、配達には慣れてきたと思う。集金は月単位だし、月によって状況が違うからまだ手探り状態であろう。集金は、まずどんなお客かをよく知ること、その上で自分の立場を理解してもらったために細かな努力をして、集金がスムーズにいくようにしてもらいたい。集金のノウハウは先輩に教えてもらうとよい。

セミナー生は仕事と勉強を両立させなければならぬ。はじめは仕事に時間とエネルギーのほとんどを取られてしまいが、仕事に慣れてきたら勉強に力を入れていってほしい。そろそろその時期である。ここで「気合」を入れ直してもらおうと見出しをつけた。さあ 命がけて 頂上を目指そう。

受験は登山である

努力せよと言う場合は、スポーツを引き合いに出すとわかりやすい。大学を目指すセミナー生にたいしても、いろいろなスポーツを例にあげて「こう努力せよ」ということが言われてきた。私もいろいろ話してきたが、登山を引き合いに出すのが一番よいと思っている。

2009年5月の『セミナー通信』に「頂上を目指そう」という見出しで書いた。ここではその小見出しを紹介する。私の言わんとするところを汲み取ってもらいたい。「自分で決めた道だ/初志貫徹頑張り」/「登りたい山を決め/周到な計画と準備」/「頂上を見ずに/足下見て歩く」/「計画変更しない/道から外れない」/「どんなに辛くても/ひたすら前に進む」。

目指す頂上を決めないと登山は始まらない。

山は始まらない。大学受験もそう。なんとなく勉強、では勉強に力が入らない。行きたい大学・学部をしかと定めた方が勉強に力が入る。もう登り始めている生徒もいるが遅れている生徒もいる。この時期には遅れている人も山の麓には立ってほしい。そして全員でそれぞれの頂上を目指して登ってほしい。

登りはじめたら、足下を見て一歩一歩である。余計なこととは考えず黙々と勉強する。

命を懸けよう

セミナー生をみると、ひたすら勉強していてこちらが頭が下がるような生徒もいるが、ゆるんでいたり、勉強をほとんどしていない生徒もいる。毎日セミナーは大学受験予備校である。来た以上は大学を目指して全員が必死に

勉強してもらいたい。やるきのない生徒を厳しく指導したいがそれができない。校長として自分の無力がむなししい。なぜ厳しい指導ができないのかを考えて思いあつたことがある。それは、セミナー生が命を懸けていないからである。軍隊でも、重工業の工場でも、土木工事の作業現場でも、新人教育が厳しいのは命の危険と隣り合わせだからである。危険な目に会わないために教育訓練をしつかり受けからだで覚えなければならぬ。指導者が厳しいのは当たり前である。だが、大学受験では、ゆるんでも、外れても、脱落しても、命の危険はない。だから厳しさがいいのだ。

高き山を目指そう

もう高齢になっている同級生の近況報告集を見ていたら「低山歩きを楽しんでいます」というのがあった。なるほどな「低山歩きか」と思った。登山もいろいろである。登山だから辛いとは限らない。山は命を懸けるのではなく、楽しむのが本来かもしれない。しかし、死ぬ思いで登りつめて頂上に立ったときの感動と満足感は低山歩きでは味わえない。

低山歩きではなく、高い頂上を目指し、この一年「命を懸けて」勉強に励んでほしい。そして合格祝賀会では、苦勞して頂上に立った者だけが味わう喜びにひたつてほしい。

東日本大震災の津波で流失した茨城の五浦六角堂が再建され記念の美術展が東京で開かれた。岡倉天心の弟子たちの名品がずらりと並ぶ中、横山大観の「屈原」に見入ってしまった。天心は東京美術学校(現東京芸大)を創立し初代校長となつたが非難中傷され辞任、共に辞任した弟子の横山大観、下村観山、菱田春草らと日本美術院を起す。

「屈原」はこの頃の作。天心の目は世界に向き、インド、アメリカ、ヨーロッパを回り活動したが、日本では新しい日本画は朦朧体と揶揄され認められずに困窮、東京から五浦に移り再起を期す。屈原は楚の政治家、国政に励んだが中傷され失脚、「離騷」など楚辞の名作も残したが、失意のうちに亡くなった。大観は屈原に師岡倉天心を重ねて描いた。強風吹きすさむ荒野に一人立つ屈原の睨み付けるような表情から苦難に立ち向かう彼らの熱い思いが伝わってくるすばらしい絵であった。